

グンターは締め切り大堤防の東の起点に近いボルスヴァルトに行く為、ブレーメンから西行き的高速バスに乗り、国境を越えたウィンスホーテンでローカルバスに乗り換えた。

それからフローニンゲン、ドラハテン、ヘーレンフェーンを通過し、ようやくボルスヴァルトに辿り着いた頃には小遣いも底を尽き、母に幾ばくかの援助を求めねばならなくなった。

グンターが真っ直ぐカールスルーエに帰らず、ネーデルラントに足を伸ばしたと知ると、母はずいぶんシヨックを受けたが、「大堤防を見るだけだ。三日後には必ず帰るから」と約束すると、母も納得し、「ちゃんと帰って来るのよ。お父さんも深く反省しておられるから」と念を押した。

銀行に五〇〇ユーロが振り込まれると、グンターは久しぶりにレストランでお腹いっぱい食べ、ネーデルラント名物のストロップワッフルも味わった。その日はレーワルデンの民宿でゆっくり身体を休め、次の朝早く、路線バスに乗って大堤防に向かった。

父はネーデルラントを『低地』と呼び、「あんな干潟みたいな土地は、この世の終わりが来たら真っ先

に海に沈む」「北海とライン河に挟み撃ちされた場所に建国するとは物好きな連中だ」「今の世界的な異常気象を知れば、わたしなら真っ先にあの海岸線から逃げ出すがね」と懐疑的だが、今目の前に広がる低地ネーデルラントの美しさはどうだろう。まるで水と緑が溶け合うように輝き、平たい干拓地が果てしなく広がっている。運河沿いには絵本から抜け出たような切り妻屋根の家が建ち並び、すぐ側で白黒おちのホルスタイン牛がのんびりと牧草を食んでいる。この美しい国土が何世紀もかけて人の手で創出されたとは、なんとという奇跡だろう。幾度となく水に沈み、その都度、立ち上がってきた。やがてフロントガラスの向こうに大堤防が見えてくると、グンターはその長大さに目を見張った。

アフシユライトダイク（締め切り大堤防）は全長三十二キロメートル、幅九〇メートル、海拔約七メートルの世界屈指の大堤防だ。Anno Dominiの時代、一九二七年から一九三二年にかけてゾイデル内海と北海を仕切る形で建設された。

古来より、ネーデルラントは高潮や洪水に苦しめられ、堤防や運河の建設が国家的事業として推し進められてきた。わけても二十世紀初めに実施されたゾイデ

ル海開発計画は、北海の高潮から陸地を守り、干拓地を拡張することを目的とした一大事業で知られる。

その一環として建設されたアフシユライトダイクは、文字通り海を締め切り、治水の要所として国を支えてきた。堤防上面には片側二車線の快適な自動車道路が敷設され、いくつもの河口に分断されたネーデルラントの沿岸を一つに結ぶ主要交通路の役割も果たしている。

グンターは堤防中央のパーキングエリアでバスを降りると、展望台やスチール写真を見て回った。

沿道のパネルには、発案から完成に至るまでの里程標や昔の水害の様子、人力で一つ一つ石を積み上げ、旧式のクレーンや作業船で土砂を投入する様子が展示されている。ハイテク重機もコンピュータも無い時代、ネーデルラントの人々はどのようにしてこの巨大建設を成し遂げたのか、グンターには想像もつかない。

パーキングエリアの脇には、腰をかがめ、両手で石を積み工夫のモニュメントが設置され、当時の苦勞を偲ばせる。また展望台の入り口には、石と棒具を手にした三人の作業員の記念碑も掲げられている。

そして、沿道には、プロジェクトを指揮したコルネ

リス・レリー (Cornelis Ley) の銅像が建立され、海に向かう英雄のように今も祖国の行く末を見守っている。

大堤防の歴史を辿るうち、「God schiep de Aarde, maar de Nederlanders schiepen Nederland.」(この世界は神が創り給うたが、ネーデルラントはネーデルラント人が造った) という諺が思い出され、胸が熱くなった。たとえ一人一人の名は歴史に刻まれなくても、その思いは一枚岩のように祖国の礎となり、現在を支えている。父の叱責に怯え、自分の意思を強く表明することもできない自分がちっぽけに感じるほどだ。

カールスルーエに戻ると、グンターはネーデルラントの治水事業に興味を持ち、書物や記録映画を通して知識を深めた。高校卒業後は地元の工科大学に進学し、治水工学を学んだ。

ここ数年、世界的な気温上昇や異常気象により極地の氷床崩壊や海面上昇が著しく、ネーデルラントはもちろん、海抜の低い島国や、十分に整備されていない湾岸地域では、以前にも増して治水強化が叫ばれている。その点では父と共に感ずる部分も多く、自然科学と工学の両面から議論も弾む。

将来はネーデルラントに行く意志を固めると、「なぜドイツ人のお前が低地の堤防に身を捧げるんだ」と父は難色を示したが、「大きな志を持って言ったのはお父さんですよ」と今度は引き下がらない。今、ネーデルラントで進められている『第二次デルタ計画』に加わりたい願いもあり、大学を卒業するとゼーラント州の治水局に職を得て、フェーレという町に移り住んだ。

フェーレは全長三五〇キロメートルに及ぶ広大なフェール川の河口にある小さな港町だ。

遠くフランスに源流をもつフェール川は、ベルギーのアントウェルペン（アントワープ）の西側を通ってネーデルラントに入り、北海に流れ込んでいる。運河によってライン川やセーナ川とも繋がりが、政治的にも文化的にも重要な水路の一つだ。

それだけに、ひと度川が氾濫すれば、海面より低いゼーラント州の大半はあっという間に冠水し、甚大な被害をもたらす。特に河口周辺は幾度となく大洪水に襲われ、Luctor et Emergo（わたしは闘い、水底から姿を現す）が州の標語になったほどだ。

次いで特徴的なのが、フェール川の河口に築かれた締切堤防だ。

西暦一九五三年一月三十一日から二月一日にかけて、異常な高潮と暴風波浪により幾多の堤防が決壊、ゼーラント州沿岸部を中心に、二十万ヘクタールの土地が冠水し、一八〇〇人以上が死亡もしくは行方不明、数十万人が家屋や田畑を失う大惨事となった。

この大洪水の教訓から、ネーデルラント政府は国家的な治水事業『デルタ計画』を実施し、その一環として、全長三キロメートル、幅一七〇メートルに及ぶコンクリートダムを建設し、フェール川と北海を仕切った。堤防によって締め切られたフェール川は平均幅一・五キロメートルの細長い塩湖となり、ヨット、ウィンドサーフィン、カヌーなど、マリンスポーツのメッカとなっている。

また塩湖の東側には「フェールダム」と呼ばれる総面積一二〇キロメートルの広大な干拓地が広がり、ゼーラント州の主要な農用地となっている。

フェールダムは元々、熊手のようなフェール川河口に囲まれた中州で、非常に脆弱な土地だったが、数世紀にわたる干拓事業によって総面積一二〇キロメートルの干拓地に生まれ変わった。

干拓地の西側から南にかけてはフェール塩湖に接し、